

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月18日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K00464

研究課題名(和文) 地域における社会的包摂とメディアをめぐる実践的研究

研究課題名(英文) A research on media practice for social inclusion in local community

研究代表者

小川 明子 (OGAWA, Akiko)

名古屋大学・情報学研究科・准教授

研究者番号：00351156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：メディア・コミュニケーションによる弱者の包摂をめぐることは、突き詰めれば、その外部や内部に不可避に排除を生み出す論理的ジレンマが存在する。実際、ジャーナリズムは社会的弱者を擁護し、不利益を告発する役割を果たしてきたが、現代ではこうした姿勢が、サイレントマジョリティが抱える困難に対する関心の欠如と認識され、マス・メディア批判の根拠となったり、新たな排除を生み出してしまうという現状がある。

一方調査からは、地域メディアの中に、想像を超える包摂型番組が存在していたこと、インターネットを活用した当事者発信のユニークな包摂型コンテンツが多数存在していることが判明し、その可能性と課題が浮き彫りになった。

研究成果の概要(英文)：Concerning the social inclusion of minorities in media communication, it faces a dilemma that it inevitably causes exclusion inside and outside of the inclusive community. For example, although journalism has been playing a role to protect those vulnerable in society, it is now harshly criticized by what was once a silent majority, insisting the press has been indifferent to their difficulties. That discontent has increased distrust in media, which has caused further exclusion. However, in reality, many inclusive community radio programs and ideas were seen in the nation-wide survey and interviews. These researches also revealed that there were various unique programs and websites to encourage inclusivity, produced by Tojishas or people concerned.

研究分野：メディア論

キーワード：社会的包摂 コミュニティ・メディア 社会的排除 メディア実践 社会的弱者 メディア表象

## 1. 研究開始当初の背景

### 学術的背景1. 社会的包摂とメディア

「社会的包摂(Social Inclusion)」とは、1980年代から90年代のヨーロッパで、移民や若年層が基礎的ニーズや社会的制度の恩恵を受けられず、徐々に社会的参加が断たれるという「社会的排除(Social Exclusion)」という事態が起きていることに対応し、こうした社会問題にアプローチするための理念として普及した概念である(福原, 2007)。それまでの「貧困」を問題視する視点からは、その原因が個人に原因が求められるのに対し、社会的排除概念では、それを社会システムの問題として捉えようとする。その際、周縁化された人びとをふたたび社会へと包摂していくためには、社会政策さえ整えばいいわけではないだろう。人びとのコミュニケーションにおいて生ずる差別や偏見を減らし、機会からの排除を防いでいくためのメディア的、文化的、教育的方策も同時に必要となるに違いない。ヨーロッパでは、2000年以降、e-inclusion と呼ばれる社会政策を通じ、単なる政治経済的目標や技術的な提案に留まらず、たとえばBBCをはじめとする公共放送なども関わりを持って展開されてきた。テレビ画面の中に、なるべく現実社会の属性の多様性を織りこむことも試みられ、限られた送り手が人びとを一方的に表象することの限界を自覚し、一般の人びとが自ら表現するプロジェクトが模索されるなど、メディアや文化の側面からも多様な挑戦が続けられてきた。日本において、まだこうした観点からの研究は十分ではない。

### 学術的背景2. 地域メディア論の再検討

日本で1980年代から始まった地域情報化政策も、地域、とりわけ地方が情報化に取り残されてはならないとする一種の社会的包摂の理念のもとで進められた政策だったと捉えることもできる。そしてその恩恵のもとで、各地に多様な地域メディアが生み出されてきた。しかしその一方、環境の差はありつつも、インターネットが登場し、各家庭の端末から直接世界中の情報にアクセスできるようにもな

っており、情報伝達、あるいは地域情報の発信という視座を中心に捉えられてきた地域メディアの意義を改めて検討しなおす時期に来ているように思われる。その際、次の目的として、そこにかに多様な人びとを参画させていくかについて再考が求められている。これまでもたびたび「社会的統合」や「地域アイデンティティの醸成」といった側面からも地域のメディアは期待を集めてきたが(竹内・田村, 1989、加藤, 2007)、地域メディアによってそれがいかに可能なのか、そのプロセスは十分明らかにされてきたとはいいがたい。「社会的統合」という視座は、現在の社会的包摂とも少なからず重なりを持つ概念であり、地域共同体や家族の紐帯が弱まり、グローバル化による構造変化によって多様性や課題を抱え込みがちな地域社会においてあらためて見直され、目指されるべき目標となりうる。そして地域メディアによっていかにそれが可能になるのかを明らかにすることが、社会的包摂をめぐる文化論やメディア論的側面からも求められている。

### 学術的背景3. 実践的メディア論の有効性

上記の学術的背景とともに、方法論としての「実践的メディア論」を活用する。水越・吉見(2003)は、メディア社会における研究方法の一つとして、現場や社会において、ワークショップなどの実験的なメディア状況を創り出し、そこから可能的様態や仮説を浮かび上がらせると同時に、社会に参画していくことを試みた実践的メディア論の方法を提示している。学術的背景1、2、理論研究や調査の結果を踏まえ、多様な人びと、とりわけ周縁化された人びとの声や想いを共有するコミュニケーション空間を地域メディアのなかに構築し、地域社会の中で社会的包摂を実現していくためのメディア実践のプログラムを同時にデザインし提示していくことが求められていると言える。

## 2. 研究の目的

### 目的1. 社会的包摂とメディアに関する理論

## 的検討

メディアはいかに社会的包摂に寄与できるのか。社会的包摂をめぐる理論の検討を行う。とりわけ人類学、民俗学が、それぞれの文脈でいかに社会的包摂を捉えてきたのか、その知見を再検討する。その上で地域メディアを改めて「社会的包摂」のプロセスを担うコミュニケーション・システムとして理論的に検討しなおす。その際、包摂の裏側にある「排除」のプロセスについても考察する。

### 目的2. 地域メディアにおける「社会的包摂」をめぐる実態調査

地域メディアは具体的には社会的包摂をいかに担えるのだろうか。事例として、地域メディアにおける高齢者、障害者などを対象とした番組や企画、キャンペーンなどを取りあげ、それらに働くポリティクスについてヒアリング調査によって考察するなかから、地域メディアにおける社会的包摂の可能性と課題を明らかにする。

### 目的3. 社会的包摂をめざしたメディア・プログラムの提案

理論的検討、実態調査を踏まえた上で、実践的メディア論の方法論によって、社会的包摂のためのメディア・ワークショップやプログラムを実践することで、学術的貢献だけでなく、社会的な貢献も試みる。申請者が行ってきたデジタル・ストーリーテリングの手法をめぐる検討も、引き続き、この文脈において続ける。

## 3. 研究の方法

社会的包摂とメディアをめぐる理論的検討に当たっては、研究メンバーが各自、社会的包摂・排除概念、カルチュラル・スタディーズ、社会運動論などからの視座を提示し、それらを共有、検討する形で6回にわたる研究会を行なって進めた。また、地域メディアにおける包摂の実態調査は、研究分担者（松浦さと子）実施の調査を発展させる形で、インタビュー調査を行なった他、障害者や高齢

者を扱った包摂型番組の関係者の講演、ラジオ番組聴取のワークショップを9回行うなかから検証を進めた。また、メディア・プログラムの提案については、先に挙げた講演のほか、高齢者、被災者（海外）のデジタル・ストーリーテリングのワークショップを3回行い、そこから負の感情や経験を語る際の困難と可能性を抽出した。

## 4. 研究成果

研究成果に関しては、以下のウェブサイト <http://inclusive-media.net/kaken/2018/15k00464.pdf> 上に報告書を掲載している。以下はその抜粋である。

### 成果1. メディアによる包摂のジレンマ

#### -社会的包摂とメディアに関する理論的検討

昨今、障害者をめぐる番組や報道などにおいて典型的にみられるように、マス・メディアがサイレントマジョリティと呼ばれる一般の人々の痛みや困難に十分に向き合っていなかったとしてメディア批判、リベラルコンセンサス批判が起こっている。とりわけ「ネット右翼」と呼ばれる、弱者に対する社会的排除の一連の流れがどのように出てきたのかを検討した伊藤（2018 予定）は、その根源には、従来指摘されてきたような反主知主義や歴史修正主義からというよりも、反権威主義や主知主義があったものの、それが集団的浅慮などのメカニズムによって、結果的に反主知主義的な方向へと転換してしまったと分析している。つまり、排除の根源には、マス・メディアが有する専門知のありようや権威に対しての一般の人々の挑戦という、いわば民主的な思想や行為がその根底にあったという指摘である。

これまでマス・メディア、とりわけ日本のジャーナリズムは、比較的社会的弱者の状況に寄り添う報道を心がけてきたと言えるだろうが、紙面や時間が限られるメディアにおいて、そこには誰を包摂するのかという問いが常に横たわっており、その違和感や不満が新たな排除を生むというジレンマが透けて

見えてくる。つまり、メディアが多文化共生的視座から包摂に向けた報道を行ったとしても、結果としてメディアにおいて十分に表象されていないと感じるマジョリティ側が、ネット言説を介し、結果としてマイノリティを排除してしまうというジレンマである。このように、フィードバックをはじめとするインターネットを含むメディア・コミュニケーションにおける社会的排除のプロセスは、政策論などで参照されるシルバーらの三分類には収まりきらない多層的で複雑なプロセスであることが明らかになったと言える。なおこれらの課題については、一般向け成果報告 Web ページ「メディアの包摂と排除」<http://inclusive-media.net>、小川明子「社会的包摂にメディアはいかに関わるのか」(本科研報告書 <http://inclusive-media.net/kaken/2018/15k00464.pdf> p. 3-12)とともに、分担者の書籍(伊藤昌亮(2018 予定)、松浦さと子編(2017)、坂田邦子編(2016)、論文 松浦(2018),)を参照いただきたい。この点においては引き続き今後もモデル化を継続していく。

## 成果2. コミュニタリアニズム的実践の意義-地域メディアにおける「社会的包摂」をめぐる実態調査

地域メディアにおける社会的包摂には二つの方向性が見られた。一つは地域メディア自身が、自らマス・メディアとは異なるという明確な意識を持ち、オルタナティブな言説や取材対象に目を向け、社会的包摂型コンテンツを企画する場合である。その典型が札幌市の三角山放送局であり、障害を持つ人々や話すことのできない ALS 患者などにも番組が作れるよう、さまざまな器材を開発し、スタジオへと包摂を試みている。実際、想像よりも多くのコミュニティ FM において、マス・メディアとは異なる視座からの包摂型番組が企画・放送されていることが明らかになった。そこにはコミュニタリアニズム的視点

を色濃く映し出した包摂、そしてコミュニティ内部での連帯の思想が見えてくる。

一方、社会福祉協議会や NPO 法人、作業所などが主体となって、自ら放送を使って自らの主張を発信していくパブリック・アクセス型番組も、紹介から 20 年余を経て、少なからず浸透していることが明らかになった。

他にも、インターネットなど、多様なメディアを用いたユニークな発信が世界各地で広がっており、またそれらが国を超えてネットワークされている点で今後の展開にも注目していきたい。これらの詳細事例に関しては、研究報告ウェブサイトの中から「コミュニティ FM におけるインクルーシブ型番組」<http://inclusive-media.net/link/program-list.html>「インクルーシブ・メディアの実践例」<http://inclusive-media.net/link/examples.html> ページを参照されたい。

## 成果3. 「見ること」「聞くこと」の意義

### - 社会的包摂をめざしたメディア・プログラムの提案

研究代表者、分担者が展開してきたデジタル・ストーリーテリング実践からは、マイノリティや被災者などが負の記憶や経験をいかに表現することができるのか、そのための対話の手法や場のデザインについて、より詳細な課題が浮かび上がった(小川,2017, Tsuchiya&Kitamura,2015)。

さらに、これまでパブリック・アクセスが志してきたような、コンテンツを制作することでメディアに参画していくということだけでなく、番組を媒介として語り合うことがそれぞれの経験を共有し合うことに繋がり、ひいては包摂に結びついていく側面が明らかになってきたことは、メディアと包摂を考える上で重要な知見であると言える。番組を媒介に自らの経験や苦悩を語る可能性(小川・北出,2017),ともにスクリーンを眺めることから始まる対話の意義(松浦,2016)は、今後、これまでの地域メディア研究などでは看過されて来た部分であった。引き続きこれ

らの知見をもとに、今後の研究に結びつけていきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕 (計 14 件)

- (1) 松浦さと子 (2018) 「コミュニティ放送とソーシャルワークの相似点 社会的包摂の番組から見る機能と役割」龍谷政策学論集 7 巻 pp. 71-86. (査読無)
- (2) 小川明子 (2018) 「英国に息づくホスピタルラジオ」放送レポート 273 号 印刷中 (査読無)
- (3) 小川明子・北出真紀恵 (2017) 「研究実践報告：送り手と受け手の対話空間を創る -名古屋ラジオカフェの試み-」名古屋大学大学院国際言語文化研究科「メディアと社会」9 号 pp. 57-70. (査読無)
- (4) 小川明子 (2017) 「研究実践報告：負の記憶を記録することの可能性と困難 -二つのデジタル・ストーリーテリング ワークショップをめぐる覚書」名古屋大学大学院国際言語文化研究科「メディアと社会」9 号 pp. 41-86. (査読無)
- (5) 伊藤昌亮 (2017) 「バッシングと炎上の社会学に向けて」日本コミュニケーション研究者会議プロシーディングス 26 巻 pp. 1-30. (査読無)
- (6) 伊藤昌亮 (2016) 「マスメディアバッシングの構造」月刊民放 46-7. pp. 13-15. (査読無)
- (7) 松浦さと子 (2016) 「研究ノート：記憶の贈与と共視の関係」龍谷政策学論集 5 巻 (1) pp. 29-38. (査読無)
- (8) Tsuchiya, Y. and Kitamura, Y. (2015) 'Digital Storytelling with Tablets to Share Experiences of the Tohoku Earthquake' HUE Journal of Humanities, Social and Natural Sciences, 38. pp. 45-52. (査読無)

### 〔学会発表〕 (計 18 件)

- (1) Tsuchiya, Y. (2018) 'Co-Creating a Life Digital Story of an Atomic Bomb Microcephaly Patient in Hiroshima' in Panel "From Hiroshima to Fukushima: Redesigning Communication Processes for Nuclear Crisis." International Association for Media and Communication Research, Eugene, The USA
- (2) Tsuchiya, Y. (2018) 'From Small Findings to Unique Perspectives: A Digital Storytelling Workshop toward Critical/Creative Media Production.' Media Education Summit, Hong Kong
- (3) Tsuchiya, Y. (2017) 'Listening, Narrating, and Creating: Possibilities of an Alternative Media Production to Hand Down Local Cultures to the Youth' International Association for Media and Communication Research, Cartagena, Colombia.
- (4) 坂田邦子・土屋祐子 (2016) 「災害を語り伝えるメディア表現：〈他者〉表象から〈自己〉語りへ」日本社会情報学会大会 札幌学院大学
- (5) 坂田邦子・土屋祐子・小川明子・北村順生 (2015) ワークショップ「地域の表象・イメージとメディア空間の編制」日本社会情報学会大会, 明治大学
- (6) 松浦さと子 (2015) 「正負の遺産を語り伝える記憶の贈与 伏見区深草コミュニティアーカイブ活動 (8 ミリフィルム収集と公開)における異世代交流より」日本社会学会春季大会, 立命館大学

### 〔図書〕 (計 14 件)

- (1) Ogawa, A. and Tsuchiya, Y. (2018) "From the Pre-Story Space: A Proposal of a Story Weaving Method for Digital

Storytelling” *Digital Storytelling: Form and Content*, Palgrave MacMillan, pp.139-154.

- (2) 清原悠 伊藤昌亮 他 (2018) 「ネット右翼の起源—一九〇年代後半のネット右派論壇の成り立ち」『ヘイトスピーチ・レイシズムを考える』 共和国 印刷中
- (3) 松浦さと子編(2017) 『日本のコミュニティ放送 理想と現実の間で』 晃洋書房
- (4) 小川明子(2016) 『デジタル・ストーリーテリング 声なき想いに物語を』リベルタ出版
- (5) 坂田邦子編 (2016) 『被災地から考える 311 とメディア』

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

一般向け成果報告サイト

「メディアの包摂と排除」

<http://inclusive-media.net>

「インクルーシブ・メディアに向けて」平成

27-29年度科学研究費補助金 (基盤C

15K00464) 報告書

<http://inclusive-media.net/kaken/2018/15>

k00464. pdf

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小川明子 (OGAWA, Akiko)

名古屋大学大学院情報学研究科・准教授  
研究者番号 : 00351156

### (2) 研究分担者

土屋祐子 (TSUCHIYA, Yuko)

広島経済大学 経済学部・准教授  
研究者番号 : 80458942

伊藤昌亮 (ITO, Masaaki)

成蹊大学 文学部 教授  
研究者番号 : 80548769

松浦さと子 (MATSUURA, Satoko)

龍谷大学 政策学部 教授  
研究者番号 : 60319788

坂田邦子 (SAKATA, Kuniko)

東北大学大学院 情報科学研究科  
研究者番号 : 90376608